

# 日本環境教育学会「原発事故後の福島を考える」プロジェクト

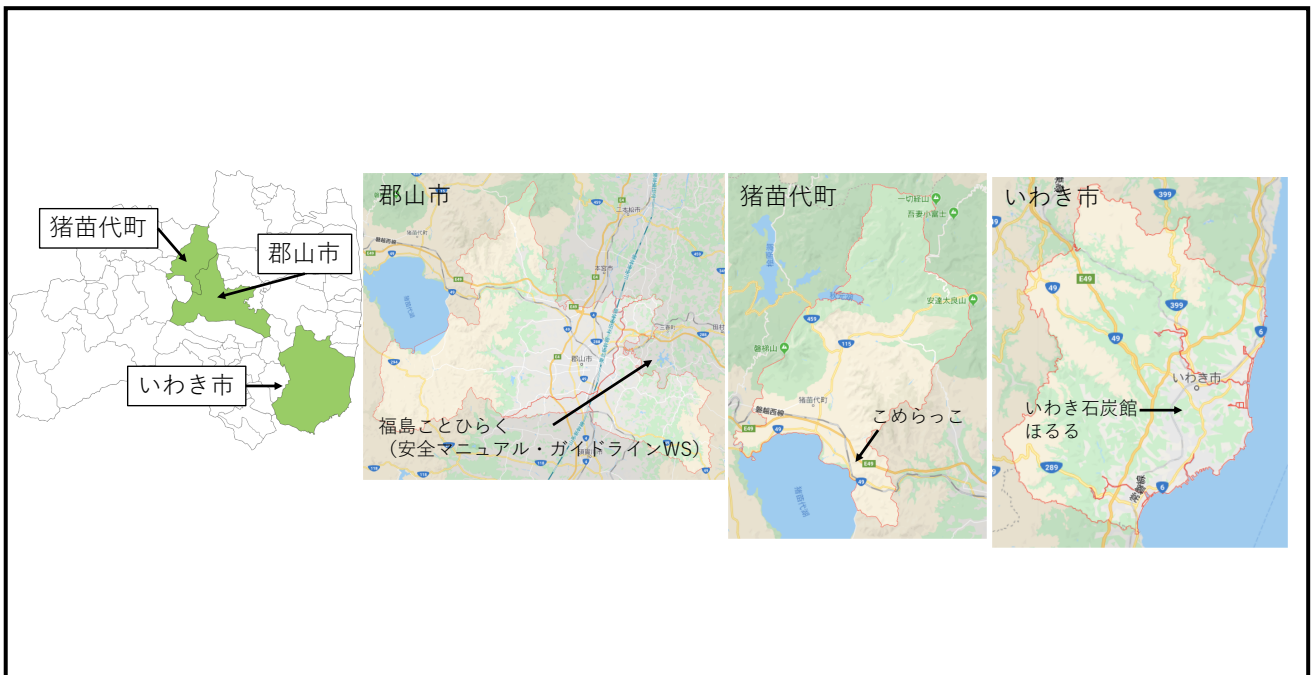
## 第6次調査報告書

- 1) 日 時：2019年1月12日（金）～14日（日）
- 2) 場 所：福島県いわき市常磐湯本町、福島県郡山市街池台、福島県田村郡三春町、福島県南相馬市鹿島区, 原町区
- 3) 参加者：12名

### 4) 概 要

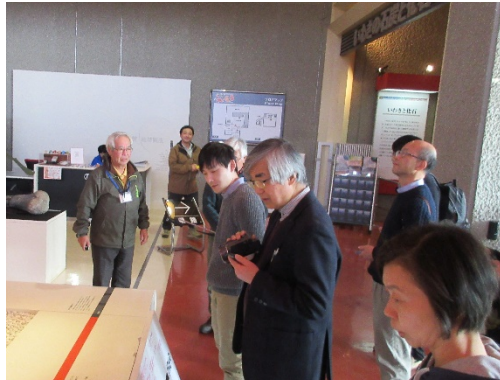
本調査は、毎年2回の頻度で最低5年間継続すると位置付けた福島訪問調査の第6次調査である。3日間の日程で開催した。1日目は、いわきヘリテージツーリズム協議会のスタッフに、いわき温泉と炭鉱の歴史について伺った。2日目は、いわきの森に親しむ会のスタッフに、市内の環境教育の実施状況について、聞き取りをした。その後、自然体験活動に関する安全マニュアル/ガイドラインワークショップを行った。3日目は、猪苗代町にある森のようちえん「こめらっこ」を訪問し、活動についてお聞きした。

### 5) 訪問地 MAP



1月12日（土）1日目

14:00～16:00 いわき石炭館ほるる（福島県いわき市常磐湯本町向田3-1）



ガイドツアーの様子



博物館の前で集合写真

熊澤幹夫さん（いわきヘリテージツーリズム協議会、野木和夫さん（常磐炭田史研究会）から、常磐炭田を中心としたいわきの近代化について伺いました。そして、いわき市石炭・化石館を、お二人と一緒に見学した。いわきヘリテージツーリズム協議会は、いわきの産業遺構を巡る産業旅行や学習旅行の企画・実施することを目的とした団体である。いわき市石炭・化石館は、常磐炭田の採掘の歴史や市内で発掘された化石が展示されている。

今回の調査では、常磐炭田の開発史や、かつて常磐炭鉱開発で温泉湧出量が減り一時枯渇したことなど、地域の観光を支える温泉と炭鉱との関係性についてお聞きした。

1月13日（日）2日目

9:30～11:30 いわきの森に親しむ会（福島県いわき市常磐藤原湯の岳2湯の岳山荘内）



集合写真



外遊びフィールド

松崎和敬さん（いわきの森に親しむ会）から、原発事故後のいわきの環境教育についてインタビューをした。こちらの会は、里山において市民が安全に気軽に楽しく利用できる仕組みを作ることを目的とした団体である。2001年に里山を市民の手によって再生を手掛けたことが発端である。現在では、市の宿泊施設である湯ノ岳山荘を管理する指定管理を担当している。

自然体験活動のフィールドとして活用する湯ノ岳周辺エリアは、斜面の向き等により放射線の影響は少ないそうである。2013年からは「ろうきん森の学校自然体験活動」を毎月実施している。震災前には、市内の小学校を対象に環境教育の出前講座を実施していたが、事故で一時ストップとなった。現在は再開しており、2017年度は小学校8校、幼稚園1園の出前講座を行った。

#### 14:00～17:00 安全マニュアル・ガイドラインWS（福島ことひらく会議室）

和田祐樹さん（ホールアース自然学校 福島校）をお招きし、アドバイスを頂きながら、安全マニュアル/ガイドラインWSを行った。WSでは、自然体験活動の一部を模した絵からどういった危険因子が潜んでいるのかを探し、ヒヤリハットに気づく危険予知トレーニングを導入として行った。続いて、全国の環境教育団体等が公表しているリスクマネジメントや、自然体験活動指導者安全管理ハンドブック（発行者：特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会）での放射線の取り扱い方について情報共有を行った。さらに、今後、福島県内で安全管理マニュアルやガイドラインを作成するべきかどうかや、作成する意義やメリット、そして「管理」という言葉を使うことは適切かどうかについて、和田さんと交え議論した。引き続き、今後の研究会の方向性を確認した。

1月14日（月）3日目

#### 10:00～11:30 こめらっこ（福島県耶麻郡猪苗代町大字壺楊壺下323）



園舎の前で集合写真



聞き取りの様子

土屋美香さん（こめらっこ）から、震災後に立ち上げた森のようちえんの取組みについてお聞きした。土屋さんは、震災後に猪苗代町の農家に嫁いだ後に、親子で参加し子育ての相談ができる場所づくりを目的に、森のようちえん「こめらっこ」を立ち上げた。

当初は週3日の合同保育から始め、徐々に畑作業や会津の伝統野菜を食べるなどの体験重視のイベントを企画し始め、今では月に2回ほど開催しているという。また、月に1回はRootsの森プレーパークに遊びに出かける、近隣の水族館とビオトープづくりをする、仲間の団体との交流イベントを企画するなど、地域連携やネットワークの形成に取り組んでいる。

野外保育の安全管理についてお聞きしたところ、保育者には最低限のお約束だけを伝え、子どもを信じて見守ることを大切にして活動に取り組んでいるそうである。放射能の危険に対しては、ホットスポットでの活動に気をつけると同時に測定を続け、結果は園舎で保存しているそうである。

今後の課題は、地域からの一時預かりのニーズや、有資格者の雇用、そして幼児教育無償化への対応だとお伺いすることができた。